



## 主張

### 確かな学力と心の教育の充実をめざして

寺井雄一

諫早中学校の朝は「あいさつ運動」で始まります。「おはようございます」、「おはよう」という短いことばの中に「今日も一日がんばりましょう」というやる気を喚起する願いが含まれています。「あいさつ」はコミュニケーションの第一歩であると考えています。プランタの花に水をやる者、職員玄関の掃除をする者、自主的に活動する生徒を見るにつけ、生徒のやる気、活気を感じます。私は学力と生活習慣・生活態度は密接につながっていると確信しています。落ち着きのない学校では学力向上などとても望めません。

全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」では、「確かな学力」が提言の最初にきています。それだけ学力向上は学校の大きな使命だと言えます。私は校内研修を軸として、職員とともに学力向上の取組を推進しています。

校内研修では生徒の実態を踏まえ、「確かな学力と心の教育の充実をめざして」という研究主題を掲げ、次の四つの柱を立て推進を図っています。一、時間割の弾力的運用（四十五分七時間授業）と時間割を固定型から変動型にすることにより、授業時数の確保とコマ設定の工夫ができ、効率的で効果的な授業の実施が期待できます。二、教科指導の充実（国語、数学、理科）と新学習指導要領の改訂では「言語活動の充実」、「理数教育の充実」が

(2)



強調されています。まずはこれらの教科から研究を進めることにしました。大切なことは基礎基本をしっかり習得させ、学んだことを活用させることです。三、道徳教育の充実と「道徳」の時間が要、深く考えさせる授業の工夫に取り組んでいます。四、家庭・地域との連携、共感、協働、絆がキーワードです。本校では家庭や地域に対して家庭学習、挨拶等の基本的な生活習慣に関して提言という形で示しています。学校、家庭、地域の取組が相まって「確かな学力」が形成されるのではないのでしょうか。校内研修で教師の資質を高め、生徒の学力向上へとつなげていくことが私の意図するところです。

評価については、「結果」を重視するものでなければなりません。私たちは生徒を評価する時に「前より授業態度がよくなった」、あるいは「やる気がない」というようなことばを口にしがちです。どちらかという得心面を前面に出し、結果は二の次という傾向にあります。極論すると「評価して終わり」です。到達目標を見据え、毎時間そこに到達する授業を仕組んでいかなければなりません。通知表の時期だけ、評価に全力を傾けるではやりっ放しと言われても反論できません。しっかりと生徒の学習成果を把握し、形成的評価を積み重ねていくこと、指導と評価の一体化を職員には指導しています。

本校校庭には「啐啄」と刻まれた大きな石碑があります。このことばには次のような意味があります。鶏の雛が卵から産まれ出ようとするとき、殻の中から卵の殻をついて音をたてます。これを「啐」と言います。そのとき、すかさず親鳥が外から殻をついばんで破る、これを「啄」と言います。そしてこの「啐」と「啄」が同時であってはじめて、殻が破れて雛が産まれるわけです。これは鶏に限らず、教師と生徒、親と子の関係にも学ぶべき大切な言葉です。本校の教育訓として末永く受け継がれていくことを願っています。

（全日中副会長・長崎県諫早市立諫早中学校長）

(3)